

< 事例編 >

はじめに

やまなしは、明るい日差しと爽やかな風と清らかな水に恵まれています。首都圏にありながら豊かな自然に恵まれた山国の県です。

世界文化遺産である富士山をはじめとする3つの国立公園と1つの国定公園に囲まれて、風光明媚な風景が生みだされています。

これらの山々の真ん中には自然のハート形をした日本最大級の甲府盆地があり、自然をありのままに活用した乳幼児の体験を可能にし、豊かな感性や思いやる心が育まれるなど、子どもたちの育ちにはなくてはならない環境を提供してくれます。

県では、平成29年10月に「やまなし子ども・子育て支援条例」を制定しました。この条例の前文と第11条（育ちの場の充実）を契機に、本県の豊かな自然環境を生かしながら、子どもたちに自然と触れ合う機会を提供できる活動の“きっかけ”となるよう、本冊子を作成しました。

～ やまなしの光を視よう！ ～

山梨県は全国一の日照時間を持つ土地柄で、ともかく太陽の光に恵まれていて明るい環境を創り出しています。

あまねく降り注ぐ日差しは、園庭からまちを照らし山々や湖を照らしてくれます。そこには、美しいカラフルな四季の移り変わりがあり、地域には家族や友達や先生方が居て、子どもたちの興味や関心を広い世界へと育ててくれます。

～ やまなしの風を感じよう！ ～

3千メートル以上の標高差の中で、風が動いています。春から夏にかけての緑の爽やかさや秋の紅葉や冬ざれた山々の木々からは、園にまで季節の香りが届けられます。

真夏の暑さから冬の寒さまで、50度近い温度差が自然の感性を育ててくれます。

～ 子どもたちの声を聴いてみよう！ ～

園庭や散歩している子供たちの声が聞こえませんか。

公園で遊び地域で暮らしている人たちとの交流が、にぎやかに伝わってきますか。裏山や湖で自然と触れ合っている子どもたちの歓声が響いています。

「人間が本当に理解できることは体験したことだけかもしれない」と言われるように、体験の重要さは認められています。

自然を通して学んだ体験は、社会生活を送るうえで大切な「生きる力」である生命の尊重、健康な心と体、自立心、豊かな感性と表現など大切な資質を生み出し成長させてくれます。

保育所保育指針、幼稚園教育要領や幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」が記載されており、その一つに「自然との関わり・生命尊重」が謳われています。

受け入れ側の小学校学習指導要領では、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた指導についての記載があります。

子どもたちの育ちの姿を、就学前と小学校とで連携・接続させていくことが大切です。

本編では、「なぜ、自然体験活動を行うのか？」という問いに応えとともに、自然体験に対する「リスクマネジメント」についても専門的知見を掲載し、具体的に活動を始められるよう、県内で活動できるフィールドや、各種助成制度について、紹介しています。

また、この事例編では、身近な「園庭」から「お散歩」を通じて、計画的に地域の特性を生かした自然体験活動事例を取り上げ、自然体験のメリットを明らかにしています。

「やまなし子ども・子育て支援条例」に謳われているように、本県の未来を担う子供たちが、自らを大切に思う気持ちと他者を思いやる心を育み、夢や希望を持って、健やかに成長していくことは、県民すべての願いであります。

是非、本冊子を活用して、自然体験活動を通じた子ども・子育て支援を始めましょう。

平成31年3月

幼児自然体験活動推進検討会委員
(山梨県保育協議会会長)

廣瀬 集一

1 事例編の活用法について

幼児期における自然体験活動が、子どもの健やかな「育ち」に良い影響を与えることは本編で述べたとおりです。

しかし、保育所や幼稚園の先生からは「どのような活動をしたら良いか分からない」といった意見や、「保育の計画にどう落とし込むか（計画書の書き方）が分からない」といった意見を多く聞きます。

こうした意見を踏まえ、県では活動の具体的な内容等を記載した事例編を作成しました。

この事例編は、①活動紹介、②計画づくり、③活動プログラム集 の3つで構成されています。

①「活動紹介」は、本県で自然体験活動に取り組んでいる実践事例について、フィールドごと（園庭や園近隣、お散歩、湖など）にまとめた事例や、子どもの「主体性」を育むことに重点を置いた事例、また、地域の森林組合と協働で保育所の裏山を整備し、園児らの活動場所とした事例などを記載しています。

それぞれの事例には、活動に至った背景や計画立案、安全管理、専門知識の習得、活動による効果や課題などを盛り込み、他の園にも参考となる項目立てとしました。

②「計画づくり」は、子どもたちの現状を把握する中で、自然体験活動を日々の教育・保育にどのように取り入れたら良いのかを、計画書の雛形を示しながら、事例をもとに分かりやすく説明しています。

③「活動プログラム集」は、子育て支援サークルなどの団体向けに、一般的な環境教育用のプログラムについて、環境省自然環境局のホームページを引用しています。

指導者は、「子どもたちにどのような姿になって欲しいのか」を常に意識しながら、プログラム集を「手段」として利用することを心掛け、プログラムを行うこと自体が「目的」にならないよう、留意して下さい。

2 活動紹介

フィールド（エリア）ごとの活動紹介

和泉愛児園（甲府市）

テーマ：園庭及び園近隣での活動

基本情報

園の名称：幼保連携型認定こども園和泉愛児園 園長：廣瀬集一

（幼児数）0歳：23名 1歳：35名 2歳：40名 3歳：35名 4歳：44名 5歳：42名 計219名

住所：山梨県甲府市湯村3-12-13 電話：055-252-5854

E-mail: izumi@kofu.hoikuen.mia.ne.jp HP: <http://www.izumiaijien.org/>

1 活動の背景

和泉愛児園は甲府市の北西に位置し、古くからの湯治場である「湯村温泉郷」の西側に位置しています。周辺はホテル旅館に続く閑静な住宅地となっていますが、北側には秩父多摩甲斐国立公園から延びた「湯村山」などの里山に囲まれ、自然にも恵まれた場所にあります。

園庭では、春には50年ほどたった満開の桜の木々が園児たちを楽しませ、秋には甘柿の木が実をつけます。園舎と子育て支援センターの建物は、園庭を隔てて広いウッドデッキで出会いの場所を演出しています。

園の西側には、貴重な水田が残っていて、自然のビオトープとなっています。少しお散歩の足を延ばすと、千塚公園や緑ヶ丘スポーツ公園などで遊ぶことができます。

2 活動の具体的な内容

○園庭の自然環境の良さ

樹齢50年の桜の木が4本あり、春には満開の花と花吹雪で園児たちを楽しませます。

秋には落葉集め甘柿の木が収穫と味覚を堪能させます。冬になるとお腹の空いた鳥たちが、せん檀の木の实を食べに集まります。



ソメイヨシノ桜が満開です。
四季の移り変わりを、演出してくれます。
～和泉愛児園園庭にて～

○園児たちの収穫

5月には、ナス、キュウリ、トマト、ピーマンなどの苗をプランターに植え、夏の収穫と味覚を楽しんでいます。



プランターに植えたピーマンの实が
大きくなりだしました。

○保護者の活動

計画的で活発に活動しています。春には昨年の秋親子で植えたチューリップの球根が黄色の花を筆頭に園庭や送迎の駐車場に咲きそろいます。

6月にはプランターに新たに花を植え、夏の間目を楽しませてくれます。



親子で球根と花植えをしました。
春になるとチューリップの可愛い花が
毎日出迎えてくれます。
～11月の園庭にて～

○地域の方々との交流

年間を通し盛んで、老人クラブの皆様が育てた野菜を収穫します。

春にはジャガイモ、夏には大根、秋にはさつまいもと季節の移り変わりとそれぞれの味覚を味あわせていただいています。



お年寄りとの交流の中で玉ねぎの収穫です。
おじいちゃん、おばあちゃんありがとう!

○園西側の水田

園舎には隣接した貴重な田んぼが残されています。

毎日のお散歩コースで、水が入るとオタマジャクシやカブトエビ、水澄ましなど小動物がいっぱい遊びだします。見てみると、とんでもなく楽しくなります。



園舎隣りの田んぼです。何がいるのかな?
自然のビオトープです。
～園舎西隣の水田にて～

○千塚公園と緑ヶ丘スポーツ公園

3歳未満児さんでも歩いて行ける距離に千塚公園があります。芝生広場が広く、思い切って体を動かすことが出来ます。3歳以上児さんは、少し遠くのスポーツ公園まで行って、遊具や芝生広場で遊ぶことが出来ます。

冬のはじめには、年長さんたちが公園で落ち葉を集め園庭で焼き芋大会を主催します。少し焦げたにおいのホカホカの焼き芋は最高でした。

○裏山登り

毎年11月には、裏山の湯村山から武田の里遊歩道を利用して、園庭から見える千代田湖・白山まで山登りです。

園名と年長さんの手形や似顔絵の入った幟を持って、山頂の神社に奉納します。眼下には、和泉愛児園が小さく、富士山が真正面に堂々と見えました。



裏山での、どんぐり拾い。
ここから北山の道の遊歩道を登ると
白山・千代田湖へ行けます。
～湯村山にて～

3 計画立案の際、留意している点

○園庭の自然環境

花と落ち葉を楽しめる桜の木と、実のなる甘柿の木を中心に植栽してきました。四季の変化が楽しめます。

秋には桜の落ち葉を集め（足りない場合は、公園に行って集めます）園庭で焼き芋大会を行います。

○園児の収穫

農地が無いので、園庭のプランターで野菜を育てます。苗植えから成長の観察を経て収穫まで、園児たちの楽しみを継続させてくれます。

収穫した野菜は好き嫌いせずに食べてくれます。

○保護者会の活動

年度ごとに保護者会の役員が事業計画を立て、準備から実施、申し伝え等年間の流れに従って行っています。

○地域との交流

老人クラブの皆さんが市民農園で育てた野菜を、春夏秋に収穫させてくれます。
立派な野菜が取れ、交流も深まります。

○園隣接の水田

掘り起しから、お田植え・成長・稲刈りの収穫まで、お散歩しながら生活の中に入り込めます。

○近接の公園

お散歩と公園遊びの組み合わせが、園児の活動意欲を高めてくれます。そっと園から抜け出した開放感がありそうです。

○裏山登り

湯村山から千代田湖・白山までは「武田の里遊歩道」の一部で、トレイルランなどに解放されている山道です。

一年に一回ですが、半日かけて登る山道の自然と眺望に園児たちは登る意欲満々です。

11月に行うので、年度初めから山道の一部を散歩します。

※これらの活動は一年間を4つの学期に分け、「年間指導計画」として立案策定していて、具体的な落とし込みが必要です。

4 活動後に留意されている点

園の自然環境を保つためには「手入れ」が欠かせません。年2回の剪定と2～3回の消毒が必要です。

焼き芋大会は住宅地の園庭で行っているのですが、隣家への配慮と、消防署への連絡は欠かせません。少しこげた匂いのほかほかの焼き芋の味は、また来年も食べたいくなります。

裏山登りは、職員が事前に遊歩道を視察して、安全性を確かめます。通りがかりの方にも道の安全を確かめることもあります。

これらの様々な活動は、年間計画や月案週案に落としとして実践され、2月の生活発表会に集約されていきます。

5 リスクマネジメントに係る取り組みや留意点

園内リスク回避には、日常の遊具や園庭の「点検」が欠かせません。担当が固定遊具と移動遊具を種類別に分けた点検票で定期的にチェックします。

また、構造物の変化も見落とさないよう、閉園時には遅番による段階的なチェックをしています。

更に、桜の木には毛虫が発生しフン害や刺されることもありますので、消毒のタイミングも重要です。

通用口の門なども、常時開放は飛び出したりしますので注意が必要です。当園では、低めのアコーディオン方式の門を二重に設置しています。

6 自然に関する知識やノウハウの習得

園内での自然環境との「ふれあい活動」については、職員が年間の企画を立て、年間・期間・月案・週案・デイリープログラムへと計画し、実践活動となります。

毎日の活動はクラスの掲示板に記載し、お迎え時に保護者が活動を知ることが出来ます。

近郊の公園では、必要に応じて管理者に問い合わせをします。裏山の遊歩道は、事前の下見がとても大切だと感じます。

野菜などの栽培や収穫は、老人クラブなどのお年寄りから教えていただくことも多くあります。

7 フィールドを継続して利用するための工夫や留意点

地域のフィールドを活用するためには、繰り返し利用することが大切だと思います。

子どもたちがそのフィールドに慣れ親しむことにより、一層安全に楽しむことが出来るからです。

突然連れて行かれた場所で「異次元の体験」をすることは楽しいことも多いのですが、危険から身を防ぐといった安全面から心配があります。

園庭も散歩道も使い込んでいくことは、大切な活動の仕方だと感じます。

8 活動することにより生じた効果

園庭での子どもたちの活動は毎日続いていくのですが、子どもたちは飽きることがありません。園庭に四季の移り変わりと、一日の変化が味わえれば、子どもたちの好奇心は続いて行くと思います。

朝、元気に保護者を送り、夕方になってお迎えに来た保護者を喜んで迎えられる一日を過ごせるよう教育・保育内容を充実させたいものです。

保護者会活動は大変活発で、環境整備や花植え、七夕祭りや和泉秋祭りなど親子で楽しめる企画を実践しています。小学校へ進学して、PTA活動に携わる保護者の方が多いです。

9 活動することで見えてきた課題

保育所・こども園は、乳児から小学校就学前までのお子様が通っています。

まず、園内外の環境を整えることは真っ先に行うべきことだと思います。

園内で一日の移り変わりや四季の変化を感じることが出来たら、どんなに素晴らしいことでしょう。

そして、園周辺を散歩しながら、広がる自然やまちを見て、聞いて、感ずることで子どもたちの世界が少しずつ広がっていくのではないのでしょうか。

更に少し足を延ばせば、山梨県は大きな「公園」や「里山」に接することが出来る環境に恵まれています。

子どもたちが様々な環境を繰り返し使い込むことにより、次から次へと発想を広げ、遊びを広げていきます。

そして、使い慣れることが事故などのリスクをより減らすことになります。

基本情報

園の名称:認定こども園聖愛幼稚園 園長:鈴木信行
(幼児数) 3歳:34名 4歳:36名 5歳:40名 計110名
住所:山梨県甲府市甲府市羽黒町618 電話:055-253-7788
E-mail: mail@seiai.net HP: http://www.seiai.net/

1 活動の背景

○園の教育目的の一つ

- ・多様な子ども集団で具体的な体験(自然、農業等)を大切にする～(中略)とし、自然体験がもたらす子どもたちの心の解放、季節の変化が知らせる折々の自然の美しさや厳しさ、生活環境への変化とその気づきと対応の智慧。
- ・生物として生きる人間を育てる根源の一部を求めて行く活動に～(中略)ともすれば人工的に整えられた環境、保護された環境にいる子どもたちを、その発達段階の可能な限りにおいて自然の中に投じたい。

親子活動としての「森のようちえん」活動を10年来、月に1回実施している。参加人数も増え、親子で好意的に取り組んでいる様子が見える。

更に発展的な野外活動(遠方へのお出かけ)を年数回、任意参加で実施している。

2 活動の具体的な内容

自然に恵まれた環境の中で ザリガニ・昆虫採り、落ち葉・どんぐり拾い、田植え・稲刈り、芋掘りなど、時には汗だく、時には泥んこになりながら、子どもたちは「本物の体験」をしている。

幼少期1～2歳児には日常的な「お散歩」から、室内にいるのとは違った開放的な、より健康的な環境に馴染んでいく。

毎日同じような道を歩いても、その変化に気づき、積極的に関わり、自然だけでなくそこに暮らす人々との関わりも含めて吸収して行く。

毎日、朝の活動を終わると、お散歩カーを出し、いくつかのコースの中から、その日、その季節にふさわしい、あるいは変化の期待できるものを選び(下見も含め、おさんぽマップも参考に)、安全配慮をしながら巡って行く。

3～5歳児については、計画的に園外活動を検討し、公園そのもので遊んだり、自然を楽しむ以外の造形活動等にもつなげていったりすることも多い。

親子活動では、道具を使ったり、いろいろなフィールドに出かけるなど、やや広い地域での活動をしながら、自然の中での遊びと知識を広げている。

3 計画立案の際、留意している点

近隣の交通事情、工事などの場所をあらかじめ下調べ、変化のある場所・無い場所、子どもたちのお気に入りの場所、光、風、気温、騒音、動植物の様子、人との触れ合い、危ない場所も「学びの一つ」として回ってみる気持ちでいる。

また、歩きたくなったら歩く良さを確かめられるような援助も。自治会からの情報も得ている。

親子活動については下見、人数にあった用具、食物を伴うときにはアレルギー対策、指導法等についても力を入れ、保険も掛ける中、慎重さと大胆さを併せ持つ努力をしている。経費についても軽微になるよう、努めている。

4 活動後に留意されている点

「今日も楽しかったね!」、「今日は〇〇があったね!」、「今日は〇〇さんとお話したね」など、その日によっても違うが、人や場面、空気感、動植物について、軽い振り返りをする。

うがい・手洗いなどの衛生面やけが等の点検、他の先生への情報伝達も。

また、誕生会の際に事後報告したり、親子活動、スペシャル活動については、別途のお便りなどで啓蒙にも努めている。

5 リスクマネジメントに係る取り組みや留意点

下見をしたり、地域情報を収集し、工事区間・期間、不審者情報、天気予報、その日の周辺巡回送迎バス等の情報を入手する。有害動植物情報は、季節にあった物を書籍等で再確認する。

また、感染症、花粉症等にも留意する。親子活動については、他の事例集等も参考にしている。

6 自然に関する知識やノウハウの習得

専門家もしくは詳しい人を園内で育てることにより、ネイチャーゲーム指導者を育成。一般的な研修会参加。

職員に自然体験の機会をより多く設ける。書籍の購入等による自己啓発的な取組。

7 フィールドを継続して利用するための工夫や留意点

近隣の方々と園児達との積極的な交流。日常的な笑顔での挨拶や周辺整備への協力を惜しまない姿勢を維持する。

また、自治会の方々との協力関係を維持し、情報を交換し、地域活動にもできるだけ協力をしている。

8 活動することにより生じた効果

地域の方々との交流により、子どもたちも地域の方々に、自分たちから声を発するようになってきた。

子どもたちが園外に出ることをためらわないで、ごく自然な日常として捉えられるようになってきた。季節の変化を実感するようになった。

高学年は造形活動にも自然物、季節に関係する事柄等を入れられるように（表現）なっている。

保護者の中には、アウトドア活動に参加するようになった家庭もあると聞いている。

9 活動することで見えてきた課題

教職員が増え、交代勤務が多くなったため、統一しての研修会が持ちにくくなって周知が徹底しない場合がある。

安全に関することは徹底したいと考えている。親子活動は、参加人数が時折多くなりすぎると移動に難のある時がある。

行き先を検討しながらも、親に協力をお願いする仕組みを考えようと思う。

<幼児の自然体験活動に係る実践事例>

○「お散歩」未満児 1～2 歳児の活動

未満児クラスの活動は、まずは生活を作るところから始めている。生活が安定してくると、お庭に出て砂場で遊んだり、庭の草、虫等に戯れている。

夏場はビニールプールを広げてたくさん遊び、徐々に体力も付けてきている。

そんな中、生活の輪を広げ、精神的なストレスを解消していく手段として近隣へのお散歩に出かけている。

そこには未知なる物を知る喜びや、知的好奇心の高まり、身体的な適度な負荷活動を充足することの出来る活動が待っている

○お散歩時の配慮点

①安全配慮

近隣で考えられる危険性について リスクとハザード
交通事情 動植物 不審者 季節・天候的な危険
発育発達にあった対象物であるか
安全を学習するために危険箇所を見ることがも

②意 義

精神的健康 肉体的健康 日常生活の営みとして
季節の変化を身をもって知る 定点的な観察としても
発見興味関心 地域の人々との交流
地域そのものの子どもたちへの定着（原風景の形成）

○園周辺の自然に触れにいこう！

どの先生もが共通して、
「どこに行くと何があるか」
「近所の方が何かしている」
「それは楽しい？」 「興味を引き出す？」
「毎日見ることがよい？」
「安全性に心配はないか（直近の工事や危険情報についても）」
等を知り得る情報を持とう！

○園周辺「おさんぽマップ」の作成

（春の香り）

草花・雑草の息吹	どこでも	農作業を始めるお婆さんの所へ
紅白梅・花桃の花も	梅	田んぼの田お起こし

(5～6月頃)

田への水入れ 白木蓮の花 さくら(小学校)
ハナミズキ オタマジャクシの動き
ザリガニの成長とザリガニ釣り ヒメジオン
のげし たんぽぽ クローバー よもぎ
アカツメクサ おおばこ すみれ つくし
桑の木の成長 クモの巣 ツツジの花 ジャガイモ掘り
カボチャの生長 さつまいもの苗植え
神様の木(せんだん)の開花(園庭)

(7～8月頃)

おくら・ブドウ・ゴーヤの生長 ヒマワリの大輪
山椒の緑 なす・トマト・きゅうりの生長
ブルーベリーの生長 かえるの成長 鳴き声
草むらの虫たち ねこじゃらし・オオバコでの遊び
ばらの良い香り 葵の花 頻繁に飛ぶツバメたち
強くなる日差し ザクロの花
クローバーの花(花摘み9月まで千塚公園)

※アンダーラインは園全体活動

(9～10月)

台風の様子 イネの色づき・収穫
ブドウの色づき香り ザクロの実 草むらのバッタ
きんもくせいの開花と香り 紅葉に向けての木々の様子
センダングサのひつつき遊び(通称バカ)

(11～12月)

木々の紅葉(千塚公園も) ハナミズキ(園西側)
神様の木(園庭黄葉) しら檜の木のドングリ(園庭)
道路のドングリ 大根抜き トンボ 柿の色づき

(1～3月)

氷の観察 芝滑り 枯れた草むら 椿の花

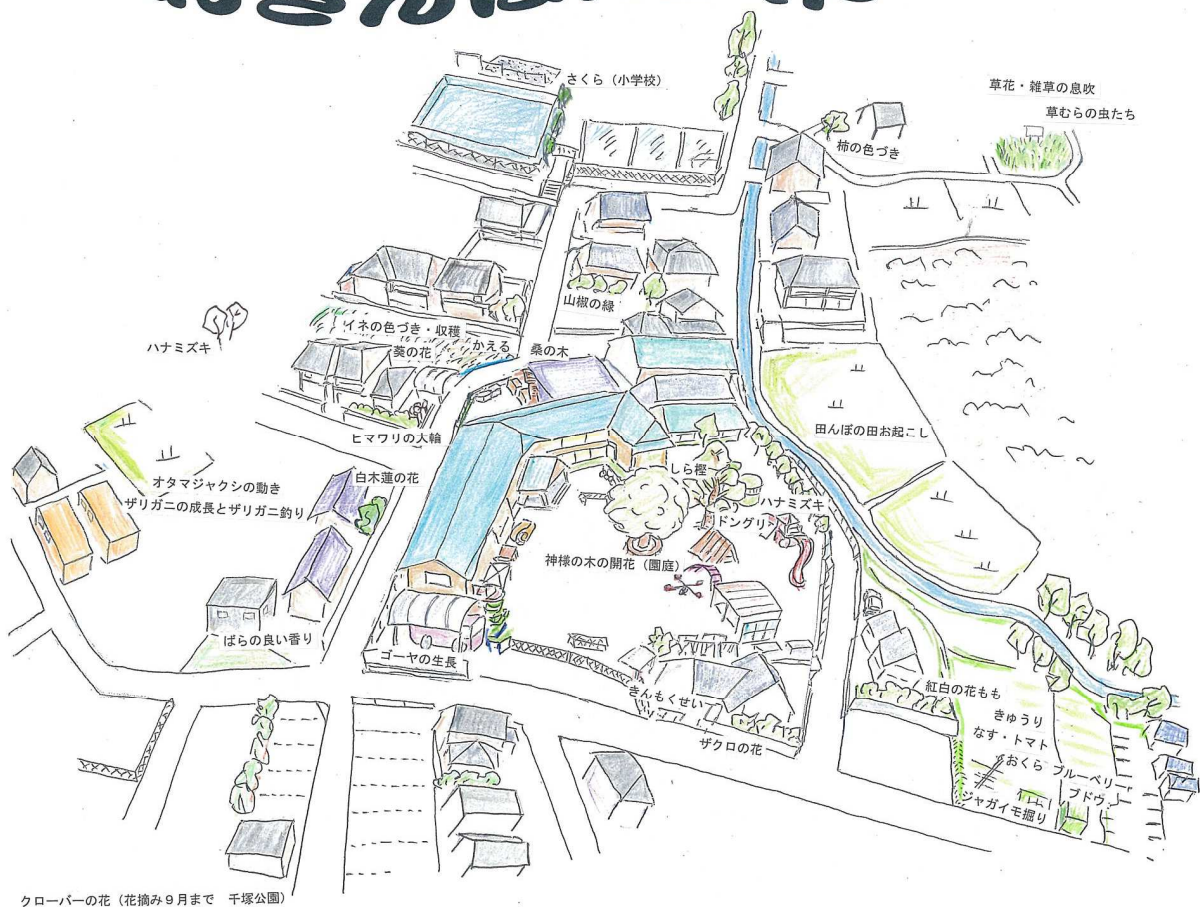


今日はかえるさんいるかな？



お散歩カーでお出かけ

おさんぽMAP



○人的環境

犬を連れておばさん 尋ねるとお話をしてくれたり、危険のない範囲で犬も紹介。

園の近くを散歩していることが多いので、幼児が話しかけること有り！

畑のおばさん 気候の良い日はほとんど畑に来て手入れをしたり、新しい作物を植えている。気さくに話に乗ってくれる。

○年長さんの活動

「秋になったね、今日は秋探しの冒険に行こう」

「以前行った大宮神社はどんな風になっているだろう？」

「秋を探しながら、いい物があったら教室にもらってこよう！」

大宮神社は由緒はあるが、地域の小さな神社。自治会の人々が氏子となって時折手入れをしている。

あまり派手さのない神社。やや樹木の種類も少ないが、気楽に訪れることが出来る。

目的地までの間にも「すてきな物が合ったら拾って行こう！」と言いながら神社まで行き、(15分ぐらい)「グループごとに好きな場所に行ってください！」「林の中にいい物が落ちていたら拾ってきてね」と。

枯れ葉(こなら・くぬぎ・くず・すぎ・さくら・すすき)・木の枝・どんぐり(こなら・くぬぎ・しらかし) 拾いながらも色々な意見が出る。

柿の実、ススキの穂・コスモスの花・とんぼ等に出会うことが出来た。

園に帰りグループごとに画用紙の並べ、「何かテーマのある形にしようか」と話しながらのり付けをし、次の参観会の際に保護者に見せることにした。

たくさん拾ってきて「家に持って行ってもいい？」と言う子達には「虫が出るかも知れないけどいいよ」等と返事をしている。



神社横の林の中で



拾ってきた落ち葉やドングリを並べて

基本情報

園の名称:認定こども園Fujiこどもの家バンビーノの森 園長:朝比奈茂

(幼児数) 0歳:0名 1歳:0名 2歳:0名 3歳:12名 4歳:12名 5歳:11名 計35名

住所:山梨県南都留郡富士河口湖町勝山3407-1 電話:0555-72-9995

E-mail: info@bambino-mori.co.jp HP: http://www.bambino-mori.co.jp

1 活動の背景

当園は、一つの園の閉園をきっかけに、理想の子育てと幼児教育の場を追求した保護者達が、平成19年に森のようにちえんと、モンテッソーリ教育を主体とする認可外保育施設として立ち上げました。

富士河口湖町大石の自然学校施設を借りて、園児7名からスタートでした。

目前に河口湖と富士山という立地と、自然学校との連携という特徴を生かし、森の活動のみでなく、水辺の遊びも日常的に取り入れてきました。

平成23年には活動主体を法人化し、平成24年には「認可外保育施設の指導監督基準を全て満たす旨の証明書」の交付を受けました。

平成27年には富士河口湖町勝山へ園舎を建て引越しをしています。園庭の森だけでなく、近隣の森を地域の方からお借りし、遊びのフィールドは広がっています。

平成28年年には県内初の「地方裁量型の認定こども園」となりましたが、保育内容は変わらず活動しています。

開園当初より、暑い日も寒い日も雨や雪の日も毎日、午前中は森(自然)の中で過ごすことを基本とした活動を行っています。

2 活動の具体的な内容

「河口湖での水遊び」。夏は概ね週1回のペースで水遊びを行っている。

園庭での水遊びもあるが、基本は河口湖での水遊び。当日は河口湖の集合場所へ直接送迎してもらい活動を行う。

活動はライフジャケットを着ての自由遊び。

湖に入って浮いたり、泳いだりする子、水草を「海草だ!」と言って取り、それを遊びの素材にする子、水際で水の感触や汲んだり、こぼしたりを楽しむ子、浜できれいな石や貝殻を拾う子、浜を掘って水が湧いてくるのを楽しむ子、水路(川)を作り水の流れを楽しむ子、虫や魚に関心を寄せる子など、どの子もやりたいことを見つけて、自ら遊びを作り出している。

年に1回は「親子カナディアンカヌー体験」を行っている。

平日に行うが、ほとんどの家庭の保護者(特に父)が参加している。他の家族との交流も含めて、保護者も楽しみにしている。

コンディションが良ければ、鵜の島(河口湖にある無人島)に上陸し、探検気分も味わっている。

年長児は3回目の体験となり、漕ぎ方もよく分かってきているので、昼休みに子どもだけでのカヌーの操船にチャレンジしている。(ロープ付き)

大人の力を借りずに、カヌーを漕ぎ進め、方向転換できた時の子どもたちの「達成感」は非常に大きい。また、それを見守る保護者の喜びも大きい。

また、これらの活動の中で、ライフジャケットの正しい着用方法、緊急時のレスキューポジション（背浮き）を遊びながら体験することも意識している。

子どもだけでなく、保護者にも正しく理解していただくことで、家庭での遊びの幅を広げ、安全に対する意識も高めていけると考えている。



親子カヌー体験



みずうみへジャンプ



年長だけでカヌーを操作



浮かんだり、釣りしたり



水中から 虫さがし



とんぼ つかまえたよ



湖畔で川つくり



園庭で水あそび



海藻とれたよ



竹のシャワー ・ 手汲みポンプ

3 計画立案の際、留意している点

湖の水位の上下により、浜の広さや浅瀬の地面の状況が変わるため、毎回の下見や所有者からの情報収集を行っている。

また「日案」では、職員の配置、子どもの水分補給と休息などについて、当日関わる全ての職員で共有している。

この日の活動に参加する子どもが、どのような遊びを展開するか予測し、それに沿った日案を主担当が作り、運営側で検証、職員ミーティングで再考、確認、直前に修正最終案の共有を行う。

活動の基本は「水辺での自由遊び」なので、湖の中に入りたがらない子は、水を使った遊びなどで入る事の促しはするが、無理強いはいしない。

これまでの様子から、それぞれの子どもが3年間の中で少しずつ、自分なりの遊びのバリエーションを増やすことができている。

職員配置数は、通常の森での活動より多く、35人に対し7名程度関わっている。

必ず「フリーの職員」を配置し、当日の想定外やイレギュラーに対応できるようにする。カヌーなどが未経験の職員には、事前に職員研修として体験できるように設定している。

当日は、フィールドの管理者(自然学校)スタッフも入り、カヌーの指導や水辺の安全管理を一緒に行ってもらっているようにしている。

4 活動後に留意されている点

子どもの様子は毎日「ブログ」で伝えている。送り迎えをしない保護者(父親等)にも活動が伝わりやすい。

また、「オンラインアルバム」に活動時の写真を毎日上げることで、ブログの補足にもなっている。

1日の終わりに、子どもたちと活動の振り返り時間を設け、他の子どもの遊びを紹介したり、後日絵を描くなどの時間を設けることもある。

職員の「振り返り」では、それぞれの視点からの子どもたちの様子と、次回への課題、改善点、改善アイデアなどを共有、記録するように努め、次回活動時の参考となるようにしている。

5 リスクマネジメントに係る取り組みや留意点

まず、前回の活動状況(含む類似)を「記録」から確認する。

下見の際には、水温・気温、浜の広さ・状態、浜や湖面の他の利用状況(予定・予測)、ライフジャケットなどについて、担当者が直接確認するとともに、フィールドの所有者からも情報収集する。前日には、活動時間の天候、風向風速を含めて再確認を行う。

この内容は、計画の立案、前日の最終確認の際に反映、共有する。併せて、当日予想される子どもの姿も共有する。

当日の活動開始時にも、これらの状況確認と、天候等の変化の予測、登園時の様子から今日の子どもの予想される姿を短時間で共有し、主担当でなくとも変化や異変を感じた際には話題にし、職員間の共有を図るように努めている。

6 自然に関する知識やノウハウの習得

河口湖でのカヌー体験等をしている自然学校（カントリーレイクシステムズ）の浜を利用させてもらい、子ども用ライフジャケットの借用、指導者1名がいる中で活動している。

ライフジャケットを付けている際の「レスキューポジション」など遊びながら、子どもたちが体験できるようにしている。

体に合った装備、正しい身につけ方、レスキューポジションなど、専門家との協力で活動が安全で充実したものとなっている。また、保護者の安心感も増し、活動への理解が得られる。

職員が体験したことのない活動は、子どもへの提供は出来ないし、安全管理が出来ないと考えているので、携わる全員が経験済みであるようにすることが「はじめの一步」と考えている。

職員の園外での体験や研修を積極的に後押しし、それが子どもの活動の広がりや深まりにつながるよう、働きかけている。

7 フィールドを継続して利用するための工夫や留意点

湖畔の浜は広くないので、一般の方がいない（少ない）時の方が、気を遣わず子どもたちの活動ができるので、日程については年度初めに固定で動かさないということではなく流動的にしておき、1カ月位前に決定できるようにしている。

森は無償で貸していただいているため、年数回の森林整備を保護者と共に行っている。

これは保護者が森の中で楽しみながら作業をすることで、森林への理解と保護者同士の交流の深まりに繋がっている。

8 活動することにより生じた効果

河口湖でライフジャケットを付けての「水遊び」というと、水に入って遊ぶことを考える人が多いと思われるが、浜での遊び、湖畔の貝や石、植物昆虫などで遊んでいることも同じように良い活動と考えている。

初年度は足先を水につけるだけの子が、翌年は腰まで水に入る、その翌年はライフジャケットの浮力を楽しむようになる、などの姿が見られている。

「1度きりの特別な体験」でなく、継続的に水と親しむことで、無理なく水辺を楽しむようになっている。

保護者は、子ども用のライフジャケットがある事、水辺で遊ぶときは着用する必要があり、正しく装着しなければ意味がないこと等を知り、水辺で遊ぶ際の注意事項を理解している。

利用している場所だけでなく、フィールドへの往復の道脇の森等にゴミなどがあれば、拾って帰っている。これは、「拾おう」というのではなく、大人が先にすることで、子どもは真似をし、いつしか子どもも当たり前前の行動になっている。

家族で公園に遊びに行った際にゴミを拾ってきた我が子に、「何でそんなもの持つてくるの」と言ってしまったことが恥ずかしくなったと、ある母親は話していた。

また、これをしていることより、捨てる人も少なくなってきた。

9 活動することで見えてきた課題

活動場所が園から少し離れているので、活動日は原則として、現地集合・解散としている。そのことを負担と感じる保護者もいるので、そこをどのように改善するかが課題の一つである。

園が送迎することも1つだが、そこへ送ってこることが親の楽しみにもなる方法を見つけることが出来れば、と考えている。

繰り返し体験（活動）できることが、子どもの無理のない発達、興味関心の広がり、遊びの発展等につながっているため、今後もその機会を減らさないよう、工夫していく必要がある。

基本情報

園の名称：清里聖ヨハネ保育園

園長：三澤裕美

（幼児数）0歳：3名 1歳：7名 2歳：15名 3歳：17名 4歳：17名 5歳：17名 計76名

住所：山梨県北杜市高根町清里3545 電話：0551-48-2558

E-mail: nursery@keep.or.jp HP: <http://www.keep.or.jp/about/hoikuen/>

1 活動の背景

当園は山梨県の最北端に位置する保育所であり、昭和33年に認可を受けている。

法人としては、昭和58年より環境教育事業に取り組んでおり、平成11年には保育所と環境教育事業部のインタープリター実習生との連携による森林をフィールドとした「環境プログラム」が始まった。

その後、平成14年に同じく法人内の自然学校で、不定期の野外保育の場「キープ森のようちえん」が立ち上がり、自然学校のインタープリターとの「森を保育資源とした保育」の実践へと移行。

以来、今日までインタープリターとの協働による保育実践を約20年間に渡り続けている。

2 活動の具体的な内容

当法人の敷地は約240ha。山梨県の県有地であり、その一部は中信高原国定公園を含む豊かな自然環境に恵まれている。

自然環境は、主に二次林と牧草地と溪谷で構成されており、その自然資源を活かした保育を日常的に行なっている。

具体的には、午前中は0歳児から5歳児まで全ての子どもたちが、グループごとに森林内を中心とした屋外で、降雨や降雪に関わらず発達に応じて活動を行う。

活動は、個人の興味に基づくものから、協同的な学びを促進するものまで、多様な活動を行っている。

また、各グループが、月に一度、自然に関する専門的な知識を有したインタープリターと活動する「森のじかん」を計画し、実施している。

3 計画立案の際、留意している点

「森のじかん」について言及すれば、①子どもの育ち、②子どもたちの声、③担任の思い、④季節のトピックス、⑤インタープリターの専門性、⑥フィールドの状態、等を保育者とインタープリターとの間でミーティングを持ち、総合的に検討し、「ねらい」や「実施する内容」を決めている。

計画性の高い活動の時間を持つことで、普段は経験できないような多様な体験（例えば水に親しむ体験であれば「溪谷の流れに出会う」という体験）をすることが可能となっている。

4 活動後に留意されている点

活動を行うことで、どのような子どもの「育ち」が見られたかを、「写真」や「言葉」で発信している。

フォーマットは作らず、保育者個々の「感性での発信」を大切にしている。

育ちの物語や、育ちへのまなざしを、保護者や他の保育者と分かち合い、フィードバックをもらうことで、個人の経験値や価値観だけにとらわれない保育者の「保育観」や「子ども観」を養うことにつなげている。

また、月に一度「ゼミ形式」での保育者同士の「学び合いの場」を開く。

そこでは、自然資源を活用した保育の中から浮かび上がってくる「疑問」や「興味」を基に、個人ではなく保育者同士でリラックスして考え合うことを大切にしている。

5 リスクマネジメントに係る取り組みや留意点

毎日のようにフィールドへ出かけているため、(大人が主体となるリスクマネジメントはもちろんであるが、)子どもたちが主体となって、どれだけリスクを捉えられているか、という尺度を大切にしている。

具体的には、その時のフィールドに潜むリスクについて、子どもたちと分かち合うミーティングを持ったり、子どもたちが主体的にリスクに気づくための「声かけ」を意識的にしている。

また、毎日のように出かけないフィールドについては、必要に応じて、「下見」を行うようにしている。

6 自然に関する知識やノウハウの習得

法人内に、環境教育事業部や、自然学校のインタープリターが多数常駐していることから、生態系に関わる様々なことを保育者が教わったり、動植物の情報を交換することがスムーズにできる、という恵まれた特性をフルに活用している。

また、これも法人の敷地内であるが、「山梨県立ハヶ岳自然ふれあいセンター」が徒歩で30分程度の距離にあることから、子どもたちがテーマを持って調べたり、子どもたちがインタープリターに直接聞きたい場合には、利用することになっている。

7 フィールドを継続して利用するための工夫や留意点

自然学校の使用フィールドと、保育所の使用フィールドが重なるため、オーバーユースや大風・大雨の後の利用など、それぞれのスタッフが下見を行い、得た情報を交換し、必要な場合は整備や一定期間のフィールドの涵養を行うようにしている。

また、整備については、保育所側は保護者との協働によって、倒木・危険木の撤去や、トレイルの整備などを進めている。

保護者と協働することで、保育所の教育方針や内容についての相互理解が進んでいる部分もある。

8 活動することにより生じた効果

当園の立地行政区では、子育て世帯や子どもの人口が減少しているが、自然資源を活用した保育方針が特色となり、結果として移住者の子育て世帯に選ばれる保育所となっている。（中には、当園がきっかけで移住を決意されたご家庭もある）

これはあくまでも、当園が偶然、豊かな自然環境に恵まれていたために、それを資源とする保育を進めた結果であり、ねらいを持った活動から生まれた効果ではない。

また、保育者も同じくで、この環境と保育方針に共鳴する方が、都市部から就職されるケースが、昔に比べて明らかに増えている。

9 活動することで見えてきた課題

自然資源を活用する保育を積極的に進めることで、当園の60年以上に及ぶ歴史の中で築いてきた「慣習」や「カリキュラム」を大きく変化させる必要に迫られている。

しかし、短い期間で大きく変化させることは、運営上難しい部分もあるため、日々の保育実践の変化に対し、対症療法的に小さく変化させていくことを続けている。

具体的には、食事や午睡等の生活習慣の見直し、また行事の見直し、そしてカリキュラムの再編である。

特に「カリキュラムの再編」は重要であると感じており、現在の保育実践に合わせたものへ、ようやく大幅な作り直しの作業が始まったばかりである。

<幼児の自然体験活動に係る実践事例>

清里聖ヨハネ保育園 保育士（保育士歴3年目） 大谷望海

【概 要】

当園では「異年齢保育」を行っており、この事例は3～5歳児26名の一つのグループ（やまねグループ）が、冬の始まりから2月末までかけて、氷と親しんだエピソードです。

当園の周りには森が広がっており、毎日のように森へ出かけます。

子どもたちは、春夏秋とその森の中で様々な体験を重ねます。そして、清里高原の長く寒い冬。小川や水たまりが凍り、天然の氷が遊びを誘います。

やまねグループの子どもたちも、冬の始まりには、小川で氷を割ったり、不思議な形の氷を集めたりして楽しむ姿が見られました。

ちなみに、年齢別保育の活動では、3歳児のグループは屋外の寒さを活かして氷を作り、実際に「かき氷屋さん」を森の中で開いて心ゆくまで味わったりもしました。

〇人が作った氷との出会い、そして実際につくってみる

そんな氷との出会いや親しむ姿がひと通り見られた後の1月のある日、子どもたちが森の中で氷を見つけました。

その氷は自然に出来たものではなく、人が作ったものでした。

色のついた氷や、お皿のような氷。子どもたちは「すごい！」「つくってみたい！」と大興奮。その日の帰りの集いでもその話が出て、作った人に聞いてみたい、という話になりました。

その氷を作ったのは、近くにある自然学校のスタッフたちだと判明。数日後、訪ねて作り方を教えてもらった子どもたちは、早速氷作りに取り組みました。

保育者も、このタイミングで様々な形のカップや型を用意しました。子どもたちは各々自分の作ってみたい形を選び、氷作りに取り組みました。

その頃、一冊の写真・絵本を子どもたちと読みました。その本には氷で様々な物を作れることが紹介されていました。

その中で、ゴム手袋に水を入れ、棒を刺して凍らせる「手の形の氷作り」に興味を持ったRくん。早速、手の形の氷を作ってみることにしました。

このように絵本などを見たり、友だちが作ったものをみて「次はこうしてみたい」と子どもたちから次々にアイディアが生まれるようになってきました。

作っては話し合っ、次はこうしてみようの繰り返しのうちに、一人ひとりの考えたり、楽しんだり工夫する姿が見られるようになってきました。

この繰り返しを十分に楽しむ時間が十分にあったことで、子どもたちの氷作りへの興味の熱が更に高まっていったように思います。



○発表会での氷のこと

この頃、子どもたちの「育ちの姿」から担任同士で話し合った結果、2月の終わりに行われる発表会で、今熱が高まっている氷作りのことを発表の内容と結びつけられないか、という話になりました。

そのことを、子どもたちに相談してみると、「やりたい!」「お母さんたちにも見せたい!」との声が多く上がりました。

氷作りが発表会とつながることになって、子どもたちの「試行」や「学び」が更に複雑になっていきました。

○発表会で氷を見せたい!

発表会は「室内」で行うことになっていました。

子どもたちは、自分たちの作った氷をその場で見せたいと、「こんな氷を見せたい!」と考えをたくさん話し合いました。

その結果、2チームに分かれて氷を作り発表する、という形に決まりました。

例年だと、やまねグループ全員で何か一つの発表を行うのですが、子どもたちがやりたいこと、考えをできるだけ形にできるように2チームにして、担任の2名が丁寧に関わることにしました。

どちらのチームも氷を作るだけでなく、作った氷を「どう、観客に見せるか」についても話し合いました。

その中で、やはり大人だけでは思いつかないことが幾つも出てきました。

剣の形の氷を作りたいというチームでは、「氷の剣で戦いたい！」と言うS君の発言を受けて、「キンキンバトル」という殺陣を見せる発表方法に決まりました。

その後、実際に動いてみて、細かいところを「こうしたらいいんじゃない？」と互いに気づきを言い合って、発表の内容が決まっていったのです。

○どう作るかも考える、そして失敗も経験する

実際に作りたい形の氷をどうやって作るか、ということについても、子どもたちの試行錯誤が見られました。

剣を作りたいチームでは、初め、作り方のアイデアがずっと出たのですが、やってみると上手くいかず。でも、やり方は変えず、それを何度も繰り返していました。

「虫取り網にテープを張って、その中に水を入れる」、「木の枝を凍らせた方がいい」など、この前段階で見られた「やってみて」→「振り返って」→「また作って」と、失敗しても失敗したことを振り返り、次の方法を考える、という流れが子どもたちの中に定着していたように思います。

しかし、殺陣の発表方法が盛り上がる中、肝心の剣の形の氷が上手くできない状況に、子どもたちのモチベーションは停滞し、その関わりで私はとても悩みました。

剣の形の氷が出来ないままの発表当日も面白くないだろうし、子ども主体の試行錯誤の剣作りの邪魔もしたくないし・・・

剣作りのモチベーションが上がらない状況で、私は悩みながらも、私が考えた氷の剣作りの案（傘を入れる細長いビニール袋を使って氷を作ってみる案）を、子どもたちに提案してみました。

一人ひとりが時間をかけて、しっかり試行錯誤してきた子どもたちは、「その案で作ってみたい」と言う返事をくれました。

そこからは、寒波の恵も受け、子どもたち一人ひとりが自分の剣を仕上げ、発表会当日を迎えました。



○こうして、本番を迎える

発表会当日。12月から森で日々氷に親しみ、1月から思い思いに氷を作り、そして2月の発表会に向けて作った氷を、子どもたちはそれぞれに披露しました。

その中で、一人ひとりが、自分の考えや思いを友達に伝えたり、友達の考えを取り入れて作ってみたり、できる限りその子のやりたい形で氷との関係性を続けてきました。

そのプロセスがどれだけ影響したか分かりませんが、発表会を「やりたくない」「出たくない」という子どもは一人もいませんでした。

緊張しながらも、楽しそうに自分の作った氷を見せる子どもたちの姿から、一人ひとりがこの場所にいることが楽しく、自信を持って動いている様子が伝わってきました。

この様子を保護者の皆さんと分かち合えたことが、私はとても嬉しかったです。

○この事例から考えたこと

2か月以上の長期に渡って、氷と子どもたちの関係が続いていく中で、担任間で大事にしたいね、と何度も話したのは、「子どもたちが主体的に取り組む」ということです。

これは、日頃から考えているつもりのことではありましたが、今回の事例を通して随分意識したと思います。

もちろん、子どもたちの話し合いの際に、保育者も加わり、最低限の整理や援助は行いました。

ひとりの子どもの「こうしてみたい」という考えや意見を、「やってみようか」と拾い、「みんなはどう思う？」と広げる声かけも意識しました。

いつしか、一人の考えや意見が「みんなはどう思う？」の声になることが自然になり、「私はこう思う」「それいいね」につながり、みんなの考えや意見として前に進むようになっていきました。

それを続けていくことで、思い思いに取り組んでいた氷作りが、「協同的」な氷の発表へとつながっていったのではないかと考えます。

また2か月以上も氷作りが出来たのは、清里の寒さがあってこそでした。

これまで私は、寒さは外で過ごすにはネガティブな面を多く想像していました。当園でも、冬季は森へ出かけるのを嫌がるような子どもの姿が時々見られます。

しかし、今回の氷作りでは、寒さは子どもたちの楽しみの一つでした。

「今日は凍ったかな？」とワクワクしながら登園して来て、話しあう子どもの姿がよく見られました。子どもたちは、嫌だなという寒さと、ワクワクする寒さの両方に出会っているようでした。

寒さや氷が、子どもたちの育ちにとって十分資源となる手応えを感じた2か月でもありました。



基本情報

団体名：一般社団法人ガールスカウト山梨県連盟 連盟長：青木れい子
(幼児数) 5歳：9名 小1～小3：50名 小4～小6：62名 中：42名 高：32名 計195名
住所：山梨県甲府市川田町517 電話：055-228-6637
E-mail：gs-ymnsi@eps1.comlink.ne.jp HP：www.gs-yamanashi.com

1 活動の背景

当初(認可前 1959 年～、認可後 1979 年)より、自然体験活動を進めている。
(全ての生き物が自然の中で成長出来るように出来ている。自然は無限の可能性を秘めた遊び場。体験する中で気づき、感じ、自他を理解して自分自身の変容を促す事が出来る)

○使 命

自分自身と他の人々の「幸福」と「平和」のために、責任ある市民として、自ら考え行動できる人になること。

年長～低学年に特化して、目標を記載

- ・ 目標：豊かな感性を持つ。自分を表現する
 - ・ 重点：五感を使って楽しく遊ぶ。好奇心を伸ばす。楽しくチャレンジする
- 子どもの身体的発達、運動能力の発達、精神的発達を考慮したもの

○活動の企画実施手順

- ①Plan：目標・方法 = 子どもが身に付けて欲しい事は何か。目標を達成するための方法を考える
- ②Do：実行・運営 = 子どもが自ら学び、体験する活動になるように支援。計画の見直し随時行う
- ③See (Check)：評価 = 子どもがどんな事を身に付ける事が出来たか。足りなかった事は何かを評価して次につなげる
- ④Action：改善 = 一方通行でなく、常に修正しながら実施（循環）

2 活動の具体的な内容

○連盟キャンプ事例

開催中、一貫してストーリー性を持ち、夢や別世界観を体感できるよう配慮

○テーマ：あんなこといいな！できたらいいな♪

【目 的】

- ・ 特徴的な体験活動を、少女スカウト・県内留学生に提供
- ・ 自然の中で、国・地域を超えた活動
- ・ 参加する全ての子どもが、「自己肯定感」を高められる機会

【ねらい】

- ・ 一人ひとりが「役割」と「責任」を持つ。役割体験とパトロールシステム
- ・ 十分な自然体験・技術を生かす生活体験、チームワークでプログラムに挑戦し、社会性を担う体験

【内 容】

- ・野外料理（薪集め・火おこし・火を育てる・飯盒炊飯・エコ料理体験）
- ・ドラえもんの扉（自然の扉を開けて、各ブースに仕掛けた課題を発見し、解決のためチームで挑戦する）
- ・キャンプファイヤー（変化する火を囲み、仲間との一体感・喜び・自然への畏敬の念を感じる。互いの文化を伝え、相互理解する機会とする）
- ・森のコンサート（国や地域を超えた仲間と交流を図るプログラム。自然物を使った楽器作り、身体や周辺道具を使い、演奏と歌・仲間と表現する機会）

3 計画立案の際、留意している点

- ・コアメンバー決定 ・実行委員制 ・予算 ・広報
- ・過去の類似事業等の把握と、留意事項の確認
- ・野営、舎営プログラム、マネジメント検討
- ・安全（事故、食物、開催場所の調査）

4 活動後に留意されている点

- ・低学年に特化して記載
次回に繋げる。必要に応じて助言。成長した事への確認
- ・子どもの振り返り
〇〇が出来るようになった。自分から挨拶や話が元気にできた
時間で動く事が出来た。留学生と一緒に遊ぶことが出来た
部屋・リュックの整理が出来た。ロープワークが出来た
たくさんの歌を歌えるようになった。木陰の涼しさ、空気のきれいさを知った
自然物での楽器作りが楽しかった
- ・指導者の振り返り
指導者の野外技術不足。大きなグループでの伝達の複雑さ
少女スカウトへの声掛けのタイミングと対応能力の格差
余裕あるプログラム。プログラム変更のタイミング
- ・その他関係者の振り返り
プログラムの工夫は良い評価。年代別への配慮。時間とのバランスが更に必要

5 リスクマネジメントに係る取り組みや留意点

- ・雨天時も含め、数回の下見（コアメンバー下見・委員別下見・合同下見）
- ・使用する場所及び管理者との打合せと、リスク対応の情報共有と依頼
- ・当団体指導者（看護師・保健師等免許者）の参加
- ・緊急時への対応及びメンバー構成の検討
- ・ハザードの徹底管理と意識共有（リスク：興味や好奇心から生まれる子どもの成長に必要な「目に見える危険」への情報共有）

6 自然に関する知識やノウハウの習得

- ・ガールスカウト日本連盟主催「認定講習」受講義務（継続研修にて、単元認定保持）
- ・山梨県連盟主催「指導者研修」（海外キャンプメニュー事業への参加を含む）
- ・日本連盟主催の「野外研修事業」への参加
- ・他連盟及び他団体キャンプ事業への参加
- ・防災、減災に特化した「野外体験研修」への参加

7 フィールドを継続して利用するための工夫や留意点

- ・借りた物や場所は、借りた時以上に美しくして返す精神を徹底実行している
- ・県単位、団単位、他連盟単位、ブロック単位にて声掛けし、継続利用している
(県立八ヶ岳少年自然の家は、環境的に近隣キャンプ場に比べ、料金・使い勝手・アクセス・自然環境が良い場所として特徴的)
- ・ガールスカウト活動のスキル提供及び指導者の研鑽目的の事業への参加

8 活動することにより生じた効果

【子ども】

- ・心から楽しいと思う感情の芽生え
- ・モチベーションが上がり元気になり、自己肯定感が高くなる
- ・知らなかった技術が出来る。友達とのコミュニケーション力が付く
- ・異文化での交流の楽しさ、言葉への興味関心を持つ
- ・回りの自然への関心、見方、大切な環境を知る

【指導者】

- ・活動による楽しい結果は、事前の準備、安全への配慮、事業達成への明確な目標を共有する意識の大切さを知る機会
- ・野外体験活動、技術向上、チームワークでの取り組み、結束力の確認、課題発見と次回事業への対応、スキルアップ、自己研鑽意識

【ベテラン指導者】

- ・様々な技術体験を持つ指導者からの確かなスキル
- ・応用を学ぶ機会。年齢差のある指導者との交流と団結力
- ・生涯教育活動としての再認識

【地域等】

- ・活動内容への高評価
- ・地域からの原材料を含む食品調達での広報活動と還元効果



野外活動①
作戦タイム（チームワークで話し合い、良い方法をお互い見つけていく）



野外活動②
小さな友達に自分の声・手で伝える
(学びの伝承・コミュニケーション能力・伝わる喜び)



野外活動③
元気になるおまじない（チカカコール）
異年齢での活動を楽しむ（おもいやり・協調性）



野外活動④
ロープワーク（本結びから複雑な「もやい結び」まで、きれいにしっかり、力を込めて、そして、丁寧に素早く繰り返す）
(技術力・生活への応用)



野外活動⑤
ドラえもん(非日常・ストーリー性のある活動・創造性・主人公になりきる・五感・表現力)



野外活動⑥
課題(水運びゲーム)に留意しながら5感をフル回転して、自然の中を走る(運動能力・バランス感覚・アビリティ)

9 活動することで見えてきた課題

【子ども】

- ・五感を生かす、自己肯定感の向上、チームワーク、体験活動等の充実
- ・楽しかった事、感じた事を仲間に伝え、共有する事の大切さ
- ・チームで話し、より良い方法をみんなで見つけていく過程
- ・自然、使用するフィールドへのマナー・ルールについて学ぶこと
- ・自尊心、自立心、自己研鑽能力、創造性、自然への畏敬の念、広い視野、責任感、ボランティア精神、協調性、礼儀、公共心、時間、命、自然などの大切さを大切にすることを養うこと

【指導者】

- ・楽しい活動、子どもが気づくための工夫と、達成感や満足感に繋がるようなプログラムの作成
- ・やりたい事、思った事を実現できるという意識。寄り添い取り組む力
- ・次回に繋げる継続及び対応力。野外活動技術の習得と格差の是正
- ・受容的対応、共感、忍耐、疑問を持つ事を歓迎する態度
- ・多様な価値観を認める。前向きな姿勢。適切な援助。
- ・子どもの持っている力を的確に判断する。責任の範囲を見極める
- ・任せた役割を見守る指導者としての姿勢の認識
- ・指導者同士で協力、協調する姿を見せることは、民主的な運営、協調性の大切さを示す良い機会となる
- ・非日常、野外技術、限りある条件の中での自然活動は、自己研鑽を含め、日々継続した取り組みの大切さを再認識する機会

【ベテラン指導者】

- ・確かな野外活動技術の伝承と応用への活用
- ・生涯教育団体としての意識改革
- ・若い指導者への技術向上のサポート
- ・ガールスカウト指導者のロールモデルとしての位置付け
- ・活動内容の応用と充実

基本情報

園の名称：幼保連携型認定こども園開地保育園 園長：亀澤正隆
 （幼児数）0歳：1名 1歳：10名 2歳：15名 3歳：18名 4歳：12名 5歳：19名 計75名
 住所：山梨県都留市小野623 電話：0554-43-3647
 E-mail：kaichi@ruby.plala.or.jp HP：http://shinseikai.ed.jp

1 活動の背景

当園は、園のすぐ裏に大きな山を構え、自然豊かな土地が広がっていましたが、これまでその山を保育に活用した例はほとんどなく、人が入らないことで木々が生い茂り、鬱蒼とした森となっていました。

平成22年、南都留森林組合の事業により、裏山を含めた整備事業が行われ、この整備により園児が活動できるフィールドが出来上がりました。

整備当初は、自然を活用できる保育環境が整ったことに喜び、年に数回、森で自然に触れ合うことを目的とした保育活動をしていました。

しかし、この時、私たちは自然体験について学んだり、知識を深めることに対しての意識が薄く、「子どもがのびのび自然の中で遊べることに意味がある」そんな感覚で活動を行っていました。

そんな矢先の平成26年秋、園の周辺に群れから離れたと思われる1匹のサルが現れるようになりました。

そして、そのサルが突然園庭に飛び込み、園児が襲われる事故が起きてしまいました。このサルは、私たちは普段から利用している森の中にいたのでしょう。

この事故を通して「自然」に対する無知の怖さを目の当たりにし、このまま森の活動を継続して良いものか非常に悩みました。

しかし、「危険だからやらない」のではなく「どうしたら危険でなくなるのか、危険を回避できるのか」そこを追求しなければ、子どもたちから経験の場をどんどん奪ってしまうことになる…

それは当園の保育方針に背いている。そんな思いから「自然で安全に活動するための準備」を地域の方々にご協力いただき、ご指導いただくことになりました。

これにより、大学の先生・市の学芸員・森林組合・製材所社長・地主・保育士・園長で構成された【森の整備委員会】が発足されました。

この委員会では、自然の基本について学ぶことはもちろんのこと、自然体験プログラムの構築などを行う他、この裏山を今後どのように守り、整備していくかについて、2～3か月に1回話し合いを行っています。

2 活動の具体的な内容

「たくさんの経験を通して、子どもたちの持つ無限の可能性を広げたい」という保育方針のもと、日々の保育・教育を立案しています。

その活動の一部として、週に1度、裏山を使った「自然体験活動」を行っています。
自然の中にあるものを使って遊ぶ自由な発想は、子どもたちの「自分らしさ」を発揮できる機会でもあり、また園児にとっても、保育者にとっても、様々な「発見の場」でもあります。

年長児になると、「生きる力を育むプログラム」として、間伐体験・製材体験・ぶり縄クライミング・火おこし・薪割り・ドラム缶風呂・巣箱づくりなどを行っています。

○森の整備委員会の役割

【目的】

子どもたちの「安全」を確保した中で、たくさんの経験ができるよう、各委員の専門性を生かしたフィールド整備や活動を行う。

子どもの遊びを中心に考える中で、人が動物・森との付き合い方を学べるフィールド整備や企画を立案し実行する。

【活動内容】

- ・フィールド整備
- ・危機管理研修（年2回）
- ・ロープワーク研修
- ・野外での救命救急
- ・緊急時対策マニュアルの作成
- ・大学生との交流
- ・親子遠足の企画実施
- ・他園との合同研修
- ・植樹活動
- ・オープンキャンパスでの企画
- ・ぶり縄クライミング
- ・間伐体験
- ・製材体験
- ・火おこし体験
- ・カヌー体験
- ・登山
- ・巣箱づくり
- ・ご飯炊き指導
- ・ナイトハイキング

○森の整備委員会関係図



3 計画立案の際、留意している点

まず一番に、子どもの現状をとらえ、全体で把握することから始まります。

活動する子どもたちは、今何が出来ていて、何ができていない、または足りないのか、保育士が園児にどうなって欲しいのか、どのようなことを経験させてあげたいのか、などを保育士が話し合いの場で議題に挙げ、それを委員会メンバーが、それぞれの専門的な視点から討論し、課題や危険を見つけたり、話題を掘り下げ、深め、具体性を持ったものにしていきます。

有意義で安全な活動のために、このように相互に確認し合う作業に丁寧に時間を費やし、目的や目標の共通理解を図り、活動の計画立案をすることを大切にしています。

計画については、これらの話し合いを基に「計画書」が作成され、活動に関わる方々とこれを共有します。

目的・スケジュール・物品リスト・リスク管理などを細かく明記し、実行した後は、計画に基づいて活動できたか等の振り返りを行い、次の計画につなげていきます。

指導者任せの活動にならないよう、事前に保育士が専門家の指導を受け、活動時に保育士が主体的に動けるよう準備しています。

保育士自身が主導することで、森の活動が森の活動だけにならず、ここでの経験を柔軟に展開・発展させた「つながりのある保育」にしていきたいからです。

4 活動後に留意されている点

活動した内容について、保育所内だけでなく、委員を含めた「多角的な視点」で話し合いを行い、そこから発見されたことを次の活動に生かすようにしています。

5 リスクマネジメントに係る取り組みや留意点

リスクマネジメントについては、知識や技術の「研修」、保育士の「見立て」を大切にしています。

○知識の研修

- ・緊急時の対応
- ・天気の見方
- ・リュックの中身
- ・生き物との付き合い方（熊・イノシシ・ヘビ・ハチ・ダニ・シカ）
- ・植物図鑑を作る
- ・「活動計画書」の作り方

○技術の研修

- ・ぶり縄の使い方
- ・クライミング研修
- ・ロープワーク

活動のマナー化や活動計画書の使い回しは「事故」につながると考えています。

活動する対象（園児・職員等）は毎年異なります。それぞれの現況把握（園児の様子、人数、職員数など）をきちんと行い、活動時の園児に合わせた活動を計画立案・提供することが保育士のリスクマネジメントの管理につながると考えています。

6 フィールドを継続して利用するための工夫や留意点

継続して利用するためには、自然について知り、自然の現状を知り、その環境でどのように活動していけるのかを専門家の方々と話し合い、それに基づき、活動の目的・計画を立てること、そしてそれを守ることが大切です。

「自然」と「そこで活動する人たちの安全」を守るためには、自然に対する人間の理解と節度がとても大切だと感じています。

7 フィールドの整備について

（１）現状の把握

委員で森に入り、どのような木や植物、動物がいるかの把握を行った。

ここでは、今後起こる可能性のある問題の抽出も行った（例：木の種類や木の年齢な

ど、森の健康状態の把握を行った)

(2) 計画

委員ごとに専門的な立場で現状の把握をしたうえで、森で出来ること・やりたいこと等を上げていった。

上がった意見を委員会で話し合い、子どもに大切なこと、森に大切なこと、生き物に大切なことを中心に考え、選考を行った。

計画は短期計画(1年～2年)、中期計画(3～5年)長期計画(10年)に期間を分け、整備計画を作成した。

(3) 実行

当年度の計画は、当年度の初めに現状の把握を行い、整備を行う。森林の整備は主に森林組合が主導して行っている。

子どもの現状を踏まえた計画(プログラム)づくりに係る事例について

1 計画づくりの考え方

○自然体験活動は、子どもの健やかな育ちに良い影響を与えていると言われています。

しかし、保育士自身が、子どもたちにとって、なぜ、自然体験活動が良いのか、ということを理解できなければ、子どもに何を伝えたら良いのか分からないことになります。

○また、何のためにやるのかが分からなければ、行事だけが増えていくことになります。そこに間違った声掛けやリスクが生まれます。

○子どもの現状を理解したうえで、こうした活動を通じて子どもたちに、「どのような姿になって欲しいのか」ということを意識した計画づくりが大切です。

○計画（プログラム）を作る際はリスクを考えたうえで、できる限り子どもたちが主体的に遊ぶことができるような環境に心がけてください。

○子どもたちが感じたことに、保育士が良き助言者となって寄り添うことが、子どもたちの主体的な「学び」につながります。

○次の事例は、5歳過ぎに入園してきた「Tくん」をもとにした計画づくりの例です。現状をしっかりと把握したうえで、Tくんがどのような姿になって欲しいかという目的（ねらい）を意識した計画の作り方を示します。

2 Step 1

～ 子どもたちの現状の把握 ～

- ・19人（2名は今年度新入園）

- ・4月から入園してきたTくんは日本語が通じず、保育者はジェスチャーや簡単な英単語、イラストなどでコミュニケーションを取っている。

しかし、ほとんど伝わっていない様子。Tくんは「せんせい!」「みてみて!」「まってて!」など極めて少ない日本語しか使うことができない。

- ・5歳10カ月まで家庭で育ったためか、身体の使い方、生活の仕方などの様子がとても幼く感じる。（家庭の養育環境が、）基本的に“自分でやる”という気持ちはなく、保育者や友達がやってくれることを待っている。そのためか、

園で毎日やること（靴をしまって上履きを履く、食事の前にコップを出すなど）を習得するにはかなりの時間がかかった。

- 誰かを頼りたいTくんと、人のお世話をしたい女の子の需要と供給がぴったり合っており、良きサポート役になってくれている。一方でTくんが自分でやらなければいけない事を女の子たちがやってしまったり、女の子たち自身のやるべきことができていなかったりと課題も多い。
- クラス全体として“個”が強い。まだ協同して遊ぶことは難しいように感じる。一人ひとりが自分の好きなこと、やりたいことに熱中する。
- 自分の思いや感じたことを言葉にすることが非常に苦手である。
女の子は兄妹に影響されているのか、大人びたことを言う子が多い。本当の気持ちに寄り添った言葉ではない。なんでも「やばい」で済ませがち。男の子は興味のあることに対する知識・語彙は豊富であるが、自分の気持ちや感じたことを話すことは少ない。

3 Step 2

～ 具体的な計画（プログラム）の立案 ～

- 薪運び、薪割り、ナイトハイクは2人（3人）1組でおこなう。
基本的に同じ小学校に入学する子がペアになっている。普段は一緒に遊ぶことは少ない子も、野外体験保育を機につながりを持ってほしい。
[] になっている子は、特に集団生活の中でサポートが必要である。
就学してからもペアになっている子がサポート役になったり、少しでも気にかけてくれたりしてくれたらいいな、という願いがある

A B	C D	E F
G H	I J	K L
M N O	P Q	R S
T 保育士		

「子どもの現状を踏まえた計画（プログラム）づくり」 著者
開地保育園(都留市) 園長 亀澤正隆



4 行事計画書の作成(例)



担当：みどりぐみ〇〇

行事名		行事予定日
野外活動保育		H30 年〇月〇日 (〇)
ねらい <なぜこの活動をするのか・この活動を通して子どもたちにさせたいこと 等>		
・他人任せにできない状況で“本気”を感じる。自分と向き合う ・感情と言葉をつなげる ・次のプログラム（火おこし、羽釜ごはん炊き）へつなげる		
この活動のための準備		
先生たちの 事前学習	・子どもへの声掛けの方法 ・手助けのポイントの共有 ※詳細は「タイムスケジュール」に記載	
子どもたちの 事前学習	・火起こしの方法を予想する	
この活動に 必要な準備	・大学生ボランティアが参加できるか ※〇〇さんへ連絡	
当日の持ち物	・長袖のジャージまたはTシャツ、長ズボンのジャージ ・水着とタオル ・濡れても良い靴（ドラム缶を洗う時に使用） ・虫刺され対策が必要な場合は各自してきてもらう ＊保護者への通知（ ☒ 必要・不要）→ 必要ならいつ通知するか（〇/〇）	
その他	・保護者には事前に野外体験保育の意図と一日の流れ、お迎えの時間を知らせる。 ・写真と動画で活動の様子を記録する。 ・給食はクラスで食べる。	
安全管理		
・一日安全に活動ができるよう、朝の視診で体調の様子を確認する。 ・日中、蒸し暑くなることが予想されるので、水分や塩分の補給、休息をこまめに促していく。 ・薪割で刃物を使う際には、事前に使い方の説明をするとともに、必ず大人の目が届くようにする。 ・体調不良の子が出た場合は、保育士Aが対応する。		
スケジュール		
タイム スケジュール	9：15 点呼 日程の確認 ジャージに着替える トイレ 9：40 森の保育所へ出発 枝集め 下山 薪割り（園庭にて） 11：30 給食 12：30 午睡 14：45 おやつ 15：15 ドラム缶風呂準備（火起こし、できたら洗う） ごはん炊き（火起こし、米研ぎ） ドラム缶風呂 18：00 夕食	

	19：00 ナイトハイク 20：00 ナイトハイク ふりかえり 20：30 保護者お迎え スライドショー	
グループの組み方 並ばせ方 配慮点	・ Tくんには、保育士Bが個別につく。 ・ 枝集め、薪割り、ナイトハイクを共にするペアを組んでおく。	
加配の役割・お願いすること		
依頼する人 園長	役割・お願いすること	依頼日
保育士A	1日を通して活動補助 体調不良、ケガへの対応	
補助A	夕方～ Tくんへの個別の関わり 英語での通訳 ナイトハイク	
森林組合	薪割り指導、補助 ナイトハイク	
補助B、補助C	午前中のプログラムのサポート 特に刃物を扱う場面	
保育士B	Tくんへの個別の関わり	
給食	夕食の準備（食材の購入、豚汁の調理、食器の用意など） 子ども 19名 大人 12名くらい	
保育士C・D・E	17時～ ドラム缶風呂 補助 夕食 準備 片付け ナイトハイク	
保育士F	遅番終了後～ 夕食 片付け ナイトハイク お迎えに来た保護者の誘導（ホールへ）	

※この活動に関わってくださる方にはこの計画書をお渡ししましょう。

予定と変更したこと・その理由	
変更点	
理由	
変更点	
理由	
反省	

【備考】

園長	主幹	主幹

活動プログラム集

すぐに使える！自然体験プログラム(環境省ホームページ)

この資料は環境省のホームページを基に、山梨県(子育て支援課)が編集・加工して作成したものです

■ 環境省(自然環境局国立公園利用推進室)では、子どもたちが幼少期から自然と触れ合い、自然の魅力や大切さを知ってもらうため、子どもたちの「遊び」の中に自然体験活動を取り入れることができるよう、指導者向けの活動プログラムを用意しています。

■ このプログラムは、小学生前後の子どもたちが楽しめるような内容となっていますが、対象となる子どもたちの年齢やフィールドなど、それぞれの状況に応じて、適宜アレンジすることができます。

環境省HP

NATS 自然大好きクラブ「すぐに使える 自然体験プログラム」
<http://www.env.go.jp/nature/nats/tryandsearch/pro.html>

QRコード



1 このプログラムの活用にあたって

○個々の活動プログラムを実施する際に、参考となる「基本的な流れ」を紹介します。

○プログラムは、おおまかに「導入」→「展開」→「まとめ」の順に進めていきます。

(1) 導入

アイスブレイク(自分自身やグループの緊張をときほぐす)、身体や頭をときほぐすウォーミングアップ、目的の共有化、参加者同士・参加者と指導者との間に信頼関係を築くなど、心と体の緊張をときほぐし、五感を鋭くしたところで、「展開」に進みます。

(2) 展開

プログラムの「本体」とも言える部分です。自然と遊んだり、調べたり、感じたり、表現したり、みんなで身体を動かしたり、様々な選択肢があります。プログラムを考える際には、目的を意識しながら、まず、この部分で何をやるのかを考えましょう。

(3) まとめ

プログラムの中で一番大切な部分とも言えます。

やってみて「楽しかった」ということは大切なことですが、今日体験したプログラムが子どもたちの自然への興味や理解にどう結びついたのかを見極める必要があります。

何か変化があったのか、あったとすればどんな変化があったのか、あまり効果が無かったとすれば、どう工夫すれば良くなるのか、「まとめ」をきっちり行うことで、次のプログラムの展開に向けた様々な示唆が得られるはずです。

2 自然体験活動の指導方法

(1) 自然体験を一緒に楽しむために

a 危険予知と自己回避

自然体験活動は、野外活動という性格上、自然から得られる感動も大きいとともに、様々な危険もはらんでいます。

安全対策は「危ない」からと子どもの行動を制約するよりも、あらかじめ危険を予測して、危険をなくす、あるいは緩和する方向で考えることが基本です。

同時に、万が一の対策を講じ、職員との打ち合わせを密に行いましょう。

子どもにも、どこに危険が潜んでいるかを伝え、自己回避の考え方を身に付けるように努めて下さい。

b フィールドマナーを守ろう

自然体験活動を行うことは、少なからず自然環境に影響を与えます。
良い自然環境を持続できるよう、正しい自然との付き合い方を伝えることも大切です。

- I ゴミを捨てない（フィールドにゴミが落ちていたら拾って帰る）
- II生きものをむやみに傷つけない
- III 立ち入り禁止の場所には入らない

(2) 活動前の注意点

a 下見の方法

活動プログラムを行うには、事前の「下見」が不可欠です。

当日のフィールドは、活動を行える条件を満たしているか、危険はないか、危険を回避するにはどのような対策を講じたら良いか、などを考えます。

下見を十分に行うことで、事前準備や当日の活動の充実度が変わってきます。

b 服装について

長そで、長ズボン、帽子を忘れないこと（肌の露出を防ぐことで、大半の危険から身を防ぐことができます）

c 下見の方法

- I 活動を行う場所の「自然」の確認（雑木林、広場、動植物、静けさ、など）
- II コースの確認（集合場所、活動の実施場所、休憩場所、解散場所）
- III 危険箇所の確認（交通事故、危険な動植物、迷いそうな道、崖、など）
- IV トイレの場所確認（便器の数、トイレトペーパーの有無）
- V タイムテーブルとの照合（子どもの歩く速さを考えながら、活動する時間を決める）
- VI 現地への行き方（使用する交通手段、必要な経費、道順、危険箇所）
- VII 雨天時の対応（決行、延期、中止、途中で雨が降ってきたときの避難場所）
- VIII 救急時の対応（救急病院の連絡先、行き方、連絡手段）
- IX フィールド使用の手続き（管理事務所への申請、他の団体、他のイベントとのバッティングを確認）

d チャンスを逃さない

指導者が伝えたいことだけを重視するのではなく、思いがけない自然現象や子どもの発見を大切にしましょう。

e 一緒になって楽しむ

指導者自身が楽しんで参加していないと、子どもへの言葉が表面的になってしまいます。
自分の中で、子どもと一緒に楽しむことを忘れないようにしましょう。

f 説明は短く

指導者からの一方的な長い話は、子どもたちの集中力を奪います。

結論を先に説明して、それから補足説明に入りましょう。ルールの解説は、要点をまとめて話しましょう。

(3) 「振り返り」の重要性

振り返りでは、次のステップを踏んでいくことが大切です。

思い出す → 表現する → 分かち合う

「思い出す」作業では、子どもに思い出す時間を十分に与えましょう。子どもが自然体験のときのことを思い出せる「言葉かけ」を意識して下さい。

「表現する」作業では、子どもの気づきを否定しないこと。一人ひとりの良さを強調してあげることを大切にしてください。

「分かち合い」では、一人の子どもの気づきを全員の認識として広げられる言葉を返してあげましょう。

3 自然体験プログラム集（プログラムの詳細は、環境省のホームページをご覧ください）

自然で遊ぼう！			
宿がえ鬼	めだまっちを探せ	カケスとカラス	ききなしをつくってみよう
葉っぱじゃんけん	木に登るひつじ	いなずま脱出ゲーム	川あそび(入門編)
森のあいいうお	川をわたってみよう	何回飛ぶかな？	スキヤキハイク
木の葉ふとん	ケヤキのパズル	水中で宝さがし	ビーチコーミング
今日のうんせいは？	ネイチャーライン	何がかいてあるのかな？	木ばけ石ばけ
なりきり探偵団	どっちが強い	たね集めゲーム	鹿さん、まあたいへん！
月夜のかくれんぼ	だれが大きく鳴らせるかな？	色さがし	手のみずでっぼう

観察しよう！感じよう！			
五感でさんぽ	自然のにおいさがし	感性のたいそう	上映じかんは30分
森の芸術家	やってみなくちゃ分からない	すき？きらい？	ひとにぎりの砂の中に
川のがっしょうだん	虫のレストラン	めかくしウオーク	変化さがし
雨音	ともだちの石	せせらぎコンサート	木のこどう
森の宝さがし	にのいのする葉っぱ	見れば見るほど、な～るほど！	フィルムケースの中身は何？
カモのプロフィール	葉っぱをかじったのはだあれ？	クモ調査隊	チャレンジスティック
生き物どうしのつながり	漂着物ウオーク	ヘビのうろこ	植物命名ゲーム
封筒に書かれた指令	フィールドサインをさがせ！	光で水中生物を集めよう！	リバーウォッチング
息をつめて観察しよう	何がいるかな？	川の宝さがし	森のかたりべ
木をたたえる詩	分類してみよう！	水のゆくえ	川の自然度しらべ
川の中の生き物を調べてみよう！	水中の生き物のうごき	池、湖の透明度を調べてみよう！	川の汚染度チェック
動物の行動学者になろう！	川の擬音まつり	ザリガニを採集しよう！	立体カモフラージュ
一本の枝ものがたり			

作ってみよう！			
くさぶえ	ポプリとサシェ	ストーンペインティング	箱メガネを作ろう
「ヤナ」で魚とりにチャレンジ！	水ロケットを飛ばそう！	プレイバックおえかき	この色とまれ
ドロだんごを作ろう！	2人乗りいかだを作ろう！	どんぐりこま	樹拓をとろう！
ササぶねを浮かべよう！	葉っぱしゃみせん	葉っぱのてっぼう	ストンクロッキー
ちょっとおしゃれなアクセサリー	森のおべんとうやさん	どんな色がでるかな？	落ち葉のスタンドグラス
いろんな顔にへんしん！	モビールをつくろう！	小道でであった素材たち	ア・ピース・オブ・フォレスト
ササぶえを吹こう！	俳句ふうみ	落ち葉のゆくえ	創作書道
水のながれ	リーフプリンティング	どんなおうちがいい？	私のひょうほん箱
くさばなで水車を作ろう！	木のしんたいそくてい	マツボックリの手品	バードウォッチング4コマまんが
箸づくり	みずでっぼうであそぼう！	海藻おしば	ぺたぺたマップづくり
ぐるぐるパンづくり	人間いす	タンポポの水車を作ろう！	

仲良くなろう！			
じゃんけんビンタ	つま先踏み	バックポケット	ルックアップ・ルックダウン
禅のところで123	3ヶ月後の手紙	じゃんけんまわり	ふたり鬼ごっこ
フープリレー・ちえのわ	ネームトス	人間ビンゴゲーム	クイックチェック
ひらがなシャッフル	つながりゲーム	ネイチャーネーム	おたまじゃくしゲーム
イーチワン・ティーチワン	おはなしづくり	ラインアップ	カードでふりかえり
スパイダーウェブ	落とし穴にご注意	じゃんけん名前あつめ	なかまさがし
フォーストチョイス			

※「葉っぱじゃんけん」のプログラムを、例として次ページに示します。
一つひとつのプログラムはPDFファイルになっており、クリックすると見ることができます。

自然で遊ぼう 葉っぱじゃんけん

ねらい いろいろな形の自然物があることに気づく。

時間	10～20分	人数	2人以上	季節	いつでも可
場所	野外	用具	なし		

- 1 グー、チョキ、パーに似た形の自然物（木の葉、木の実、枝など）を探します。
- 2 2人ペアになり、探してきた自然物でじゃんけんをします。
- 3 全員で輪になり、探してきたものを見せあいます。
どの部分がグー、チョキ、パーに見えるのか発表します。

Point ポイント

子どもたちがみつめてきたものは、十分に認めてあげましょう。
（例えば、同じ葉っぱを、ひとりはグー、ひとりはパーというかもしれません。）
子どもたちに対しても、他の人が探してきたものを、否定しないように話しておきます。



おわりに

子どもが幸せになる力をつけるために ～ 待てる社会、待てない社会 ～

児童文学作家「灰谷健次郎」さんの著の中に、「スピードを求めると失うものが増える」という件がある。

今はスピード時代だ。毎日のように新しい機種が開発・発売され、それに追いつけないと時代に取り残されたように感じてしまう。

新しいものをわれ先に手にいれる。早いものが勝ち、遅いものは負け、そんな世の中だ。携帯やパソコンで瞬時にその情報が伝わってしまう。

メールを送ると、もう、自分の気持ちが届いたと勘違いしてしまい、トラブルになる。

私たち人間は、「自然の一員」として、長い間ゆったりとした時間の中で生きてきた。川や山を遊び場としてこよなく愛した。

今、子どもたちを取り巻く社会(世界)があまりにも自然からかけ離れ、速く、物が多く、便利になってしまい、何が大切なのか見えにくくなり、心や体を混乱させている。

私は、2013年8月末に、アメリカ・アラスカ州の北極圏、ブルックス山脈の真ん中に位置する、エスキモー300人ぐらいが暮らす村にいた。

ここは、北極圏国立公園の中にあり、山々の美しさには目を見張る。

この村に来たのは6度目。お世話になるのは74歳のエスキモーRamond。

彼は、根っからのハンターだ。8輪車(アルゴ)に荷物をつめ、3日間のカリブー(野生のトナカイ)ハンティングキャンプに同行した。

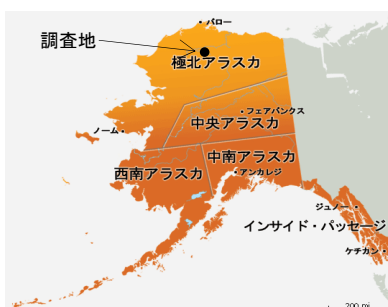
キャンプ地まで4-5時間。ツンドラの平原にテントを立て、薪を集め、火を焚きながらRamondと2人で2日間カリブーを待った。心が洗われる時間だ。

恐ろしいグリズリーベアを近づけないよう、焚き火で暖をとりながら、時折、双眼鏡でカリブーが遠くの山から現れるのを待つ。

いつ来るかも分からないのに、じっと待っていて、焦ることも、イライラしたりすることもない。

60年以上前に村を作った彼のお父さんの話や、幼い頃の村、ハンティングの思い出話を聴く。心が和む。うれしい。温かい気持ちになる。

なんと贅沢な幸せな時間だろうか。



エスキモーのカリブーハンティングキャンプ地

「教育」とは、子どもたちが幸せに生きていく力を付けてあげるためのものだと思う。ちょっとした出来事を「幸せだと感じる力」を持てることが重要だ。

いろいろな人や出来事に対して、「嬉しいなー」「有り難いなー」「楽しいなー」「ワクワクするー」「スゴいなー」「心地いいなー」などと思える感触は、スピード社会では手に入れにくい。

「感謝の気持ち」や「感激・感動の経験」は、幸せになる為に不可欠だ。エスキモーは、自然の恵みに感謝し、家族や仲間を大切に暮らしている。

自然の豊かな暮らしの中には、「幸せの花」があふれている。

何が起ころうとも不思議ではないアフリカの森 ～森が揺れる～

2009年2月、私はアフリカの森に調査に出かけた。

9回目になるが、何度訪れてもアフリカの森は深いと感じた。アフリカ・カメルーンの南東部、首都ヤウンデから1000km。

4日間かけて、やっとたどり着く熱帯多雨林の中に、静かに暮らす狩猟採集民の人々、BAKA ピグミーの村が私たちの調査地である。

アフリカでは何が起ころうとも不思議ではないと、いろいろな研究者から聞いていた。1996年、今から20数年前のこと。

浜松医科大学の佐藤教授(私の大変お世話になっている研究者)と、BAKAの男性5-6人と、森の調査に同行した時のことだった。

彼らが普段暮らす場所も森の中なのだが、そこから更に半日ぐらい歩いた奥深い森の中に、ハンティングのキャンプに出かけた。

森の中を流れる小川のほとりで1泊して、これから帰ろうかというとき、BAKAたちが慌てだした。彼らは危ないから早く帰ろうと言ったのだ。

私は、その意味がしばらく分からなかったが、空を見てすぐに分かった。西の空に大きな黒い雲が見えて、それがこちらに近づいてきていたのだ。

その瞬間、雨がまだ降ってもいないのに、森が激しく揺れた。森が揺れるなんて、見たことも、聞いたことも、考えたこともなかった。

我々は、大きな樹の下に身を隠した。木々が強い風で左右に2-3回大きく揺れたかと思ったら、次の瞬間、すごいことが起こった。

大きな木が、バタバタと落ちてきたのだ。その木は熱帯雨林の巨木の上方に引っかかっていた木だ。

我々の周りに落ちてきたその木は、太さや数が半端ではない。人に当たれば簡単に命が奪われるほどの木だ。

BAKAたちが恐れていたのはこのことだったと、初めて気がついた。実際に森で落ちてきた木で命を落とすBAKAが結構いることも知った。

熱帯雨林の深い森は、たくさんの動物が棲息しているのはもちろんだが、その森は人間の生活によって作られる大量の二酸化炭素を吸収し、同時に地球上にたくさんの酸素を排出している。

その酸素は我々動物の生きるためのエネルギーとして使われている。

何が起ころうとも不思議ではないアフリカの森。私たちは、その森の恩恵を受けて暮らしていることを忘れてはならないと深く感じた。

同時に、ピグミーたちは、自然の中で自らの命を守る「危機管理」を、暮らしの中で学んでいるのだと改めて知った。(1996年9月の体験より)



アフリカでの調査地（位置図）



アフリカの森での血液循環動態
(加速度脈波)の測定風景



ピグミーの捕まえた大蛇
(お腹にウサギが..)

～ アウトドアでたくましさを考える ～

2001年11月末、小学1年から中学1年までの子ども12人とスタッフ4人で、3泊4日のバックパッキング(徒歩旅行)をした。

バックパックに TENT や食料などを入れ、「東海自然歩道」の山道をキャンプしながら毎日15km程度歩き続けた。

空腹を体験する目的で、朝・昼兼用の少ない行動食を持ち、食べたいとき、各自食べる。バックパックが重い。山の登りがつらい。足が痛い。お腹がすく。

夜は、氷点下の中でのテント泊。くたくた。とても寒い。そして、みんなで語りながらの夕食は格別にうまい。

雄大な富士山を真近かにして、筋肉をたっぷり使い、外気を身体全体でしっかりと感じながら歩くシンプルなプログラムの4日間。

なぜか、みんなの心が近くなり、一緒に歩く「仲間の暖かさ」がしみてくる。

今の日常にはない体験、忘れていた人間(動物)としての心や身体の感触を蘇らせてくれる瞬間だった。

また、私は約40年間、継続して幼稚園の年長児約30～40人を対象とした「幼児キャンプ」を仲間や学生たちと実施している。

親から離れ、3泊4日のテント暮らし。自分で出来ることは自分です。

大変だけど、ちょっと我慢したり、ちょっと工夫したり、ちょっと努力をすれば、出来ることがたくさんあることに気づく。

テントを張る、かまどを作る、薪を割る、包丁を使って野菜を切る、薪で火をつけて調理する、山に登る、クラフトで遊びの作品を作る。

幼児とキャンプをしてみると、「小さい」「かわいい」「泣き虫」のイメージから、「すごい」「やれる」「強い」「たくましい」の言葉に代えられるくらいになる。

私は、子どもが「体験して欲しい感触」として、以下のようなことを考えて活動してきた。

- 不便な事でも、面白い
- ちょっと大変でも、頑張ったら出来た
- 腹が減って仕方がない
- 寒いときも、暑いときも、我慢できた
- お家は良いな、家族は良いな
- 友達に優しくしたら、気持ち良かった
- クタクタになるまで動いた
- 自分に、新しい事が出来るようになった

などなど。キャンプや自然との付き合いの中で、たくさん感じられる感触だ。

守られて生きていると、なかなか感じられない事でも、自然の中に身を置くと、とたんに色々な事が身に降りかかってきて、自分で何とかしなくてはならない状況が生まれる。それが大事な力を付ける瞬間だ。

幼児は色々なことが「できない」のではなく、「やったことがない」だけである。

彼らは、体験の機会がもっともっと与えられたら、たくさんの力を発揮する「潜在的な力」をたっぷり備えている。



バックパッキングプログラム



幼児の雪のキャンプ

平成31年3月

幼児自然体験活動推進検討会座長(山梨大学名誉教授)

川村 協平

＜幼児自然体験活動推進検討会 委員名簿＞

青木 れい子	一般社団法人ガールスカウト山梨県連盟 連盟長
秋山 麻実	山梨大学大学院総合研究部 教授
亀澤 正隆	都留市開地保育園 園長
川村 協平(座長)	山梨大学 名誉教授
小西 貴士	大妻女子大学 講師
佐藤 洋	都留市宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター 学芸員
鈴木 信行	公益社団法人山梨県私学教育振興会 副理事長
中澤 栄一	保育所保護者連合会 会長
中山 基	公益財団法人山梨県緑化推進機構 代表理事
原田 元	山梨県私立幼稚園PTA連合会 会長
廣瀬 集一	山梨県保育協議会 会長
横田 聖美	Fujiこどもの家バンビーノの森 副園長
(敬称略、五十音順)	